

〔資料〕

# 一枚摺の世界 — その小釈の試み(2)

## 〔解題〕一枚摺揃

社寺参詣は、主神に柏手を打ち本尊に合掌し、心中に何ごとか祈念して礼すればその目的は達せられるのだが、その折り、祈禱札や護符・御守り・御影ふだ、また境内図や略縁起を買って帰るのが、わたしたち日本人のふるくからの習わしだった。神社や寺院の授与品は今も昔もさまざまであるが、祈禱の紙札をはじめ御影ふだ・略縁起など、その多くは一枚摺で、中でもとくに、御影ふだ・略縁起・境内図の三種の一枚摺は一揃いのものと考えられていたようだ。それは、御影ばかりでなく、御影に添えて略縁起を付したものの、それにさらに本殿・本堂など境内の一部や、一山の鳥瞰図まで描き込んだものも思いのほか多く存するからである。御影ふだ・略縁起・境内図の一揃い、いわば「一枚摺揃」と称すべき例として洛陽六角堂の刷物を挙げよう。

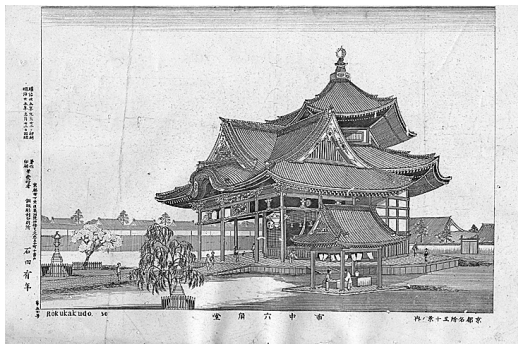
京都の真ん中、六角さんと親しまれる紫雲山六角堂頂法寺は聖徳太子の建立と伝えられ、本尊如意輪観音は太子の御持仏という一寸八分の金仏で鎌倉時代にはすでに靈仏として広く知られていた。六角堂は親鸞聖人の参籠でも世に名高く、西国観音霊場十八番として今も順礼が絶えない。



六角堂本尊  
 洛陽六角堂本尊如意輪観音の御持仏と傳へられ、一寸八分の金仏にして鎌倉時代には靈仏として広く知られていた。六角堂は親鸞聖人の参籠でも世に名高く、西国観音霊場十八番として今も順礼が絶えない。

阿部 美香・前田 智子・宮島 鏡  
 寺津 麻理絵・関口 静雄

御影ふだは統一したものか、どの観音札所も同じような大きさで、それも本尊を単身で描いたものが多くなつた。その本尊と寺の歴史を簡潔に記したものが略縁起で、ここには木版三丁の仮綴本を載せたが、一枚摺の略縁起も版行されていたはずである。銅版の境内図は明治二十五年九月に下京区四条の銅版彫刻印刷所の石田有年が「京都名所五十景内、市中六角堂」として出したもので頂法寺の蔵版で



はないが、寺と無関係だったとは思われない。なぜならこの銅版境内図には元版があるからだ。明治七年に來朝して石版を広めた米国人スモリツク作の石版境内図(禿氏祐祥編『京都社寺境内版画集』所載、昭和十七年、便利堂)である。

幕末、頂法寺能満院に無言大願が主宰する仏画工房があった。大願は他札所の御影ふだも刻しているから、頂法寺では多種多様な一枚摺が版行されていたものと思われ、一枚摺揃も独自のものであつたに相違ない。

なお、「一枚摺の世界」各項冒頭に掲出した「一枚摺」は、断らぬ限りすべて宮島コレクション(東京都江戸川区)の所蔵資料である。

(関口静雄)

6. 天照大神画像

木版彩色 八二・七×二七・九 cm  
江戸時代後期



【下部銘文】

乃結髮為髻、縛裳為袴、便以八坂瓊之五百箇御統、  
纏其髻鬢及腕、又背負千箭之鞞與五百箇之鞞、臂  
著威稜高鞞、振起弓彌、急握劔柄、踏堅庭而陷股、若  
沫雪以蹴散、奮威稜之雄詔、發威稜之讀讓、而徑詰  
問焉。

右、以伯家伝来親王感得之尊像令

模写彫刻者也。慎而敬礼莫怠矣。

日本神祇惣管領長上清仁親王四十伝正統源頭胤胤六十謹書  
大常伯資頭王家学頭源頭胤胤八歳

この一幅の上部、赤い日輪のなかに現れるのは、みずらに結った髪を美しい勾玉で飾り、千の矢の入る鞞（矢筒）を背負い、弓と鏑矢を握り、勇ましいすがたで出で立つ日神・天照大神である。尊像の下には『日本書紀』神代上第六段の本文を掲げつつ、白川神祇伯家に伝来した清仁親王感得の

尊像を模写し彫刻したものであるから慎み怠ることなく敬い礼するようにとの詞が、学頭源頭胤胤（森昌胤胤）により記されている。その銘文からは、本図が〈親王感得の尊像〉として〈学頭源頭胤胤〉の名のもとに流布し、掛軸に仕立てられ、礼拝されたものと知られる。  
同様の尊像を用いた絵札（御影や神号）が、白川神道と関連ある神社や御師のもとから見いだされており、管見に入った分でも六例を示すことができる。

- ① 山梨県河口湖町・伊藤勝文家蔵「日神之尊像」<sup>1</sup>
- ② 河口湖町・梅谷（本庄）家蔵「日神之尊像」
- ③ 河口湖町・無戸室浅間神社（船津胎内神社）「富士山旧胎内」<sup>2</sup>
- ④ 愛知県豊橋市・安久美神戸神明宮社家司家所蔵「天照大神」<sup>3</sup>
- ⑤ 千葉県・船橋大神宮「天照大神」
- ⑥ 静岡県・伊豆山神社「伊豆国伊豆御宮御神号」

このうち①②の銘には「日神之尊像者清仁親王正統神祇伯白川資頭王家前学頭源頭胤胤」とあり、④には「右以伯家伝来親王感得之真図」令模写者也」と見え、これが「日神之尊像」とも呼ばれながら、〈学頭源頭胤胤伝来〉〈清仁親王感得の図〉として重んじられていたことを確認できる。

白川伯家は、花山天皇の皇子清仁親王の御子延信王が永承元年（一〇四六）に神祇伯に任ぜられたことに始まる神道の家である。江戸時代中期、幕府公認のもとで強い権勢を誇った吉田神道に対抗し、伯家は神道説の研究に力を注ぎ勢力拡張と組織化を図る。そこにおいて大きな功績を残したのが、学頭源頭胤胤（森昌胤胤）であった。神祇伯資頭王のもとで宝暦十年（一七六〇）に学頭に補任された源頭胤胤は、『神道通国弁義』などを著しながら、特に富士北麓の御師たちにむけて熱心な教導活動を行い、門人となった御師たちから篤く慕われた。<sup>4</sup> 富士河口に伝わる①②③の尊像はその証しといえよう。

近藤喜博氏<sup>5</sup>によれば、伯家の配下に入った神社の数は宝暦年間になると急増し、特に④近江、摂津、山城など近畿地方、⑤三河地方、⑥下総、武

蔵上野など関東地方における勢力伸長はめざましかったという。親王感得の尊像は、それと軌を一にして全国に展開したものと推測される。

天照大神が靱を背負い武装する女神として描かれたことは、長い神道の歴史のなかで一度としてなかった。天照大神をめぐる新たな尊像の創出が頭胤の晩年に果たされていたことは、その神道研究とも関わって注目される。特に、尊像が『日本書紀』の記述に忠実に則って創出されていることは重要である。なぜなら、親王感得の尊像こそが正統なる天照大神の像容であるという真正性と聖性を『日本書紀』の本文を拠として証明するからである。それは神祇伯家が正統なる神道を伝える家であることの主張と呼応し、吉田神道に対抗する有力な図像となる。

『神祇伯家字則』（文化十三年《一八一六》）をひもとくと、「神道の帝道、武道にして、神武一体の御政道たる趣き」という具合に、神武の一体が理念化されていたことがわかる。そこに〈親王感得の尊像〉に関する直接の記述はないが、この武装する天照大神は神道と武道の一体を体現する根源的ですがたそのものである。学頭頭胤のもとから発信された〈親王感得の尊像〉は、公武一体の政治体制を背景に復古神道、国学、尊王論の波に乗り時流に棹さして、積極的に活用されたのではないだろうか。それが、伯家の教説を学んだ各地の神社や御師によって、御影や神号に導入され、あらたな図像をも創り出しながら広く礼拝のための尊像として庶民に授与されたことは、白川神道の庶民文化への普及という側面からも注目される。前回掲げた「伊豆国御宮御神号」はその好例である。参考のために、船橋大神宮の朱印（「下総国船橋社務所印」）の捺された天照大神画像も掲出しておこう。

船橋大神宮は意富比皇大神宮ともいい、伊勢皇大神宮を祀る。撰社の茂呂神社は木花開耶姫命を祀っている。『意富比神社社記』（史料編纂所贈写本）や『白川家門人帳』『白川家諸国神社附属帳』によれば、神主富氏が宝暦十一年に白川家の執奏により従五位を得て上総介を称したことが知られ、絵札はその時勢を鮮やかに反映している。房総半島から大山詣や富士



木版 六九・五×三一・六 cm  
江戸時代後期

詣を目指す人々がその往還において必ず通過する船橋大神宮で、この絵札が授与されていたのであるから、伯家神道の教えを地域社会に普及、浸透させるうえで、この絵札の果たした役割はきわめて大きい。  
白川神道に入門しその学説を受けた各地の神社が、親王感得の天照大神の尊像を自分たちの祭祀に取り込み普及させていった。伯家伝来の尊像は、その神道説の先頭に立って庶民と向き合い、また教義を図像に象って人々を導いたのである。（阿部美香）

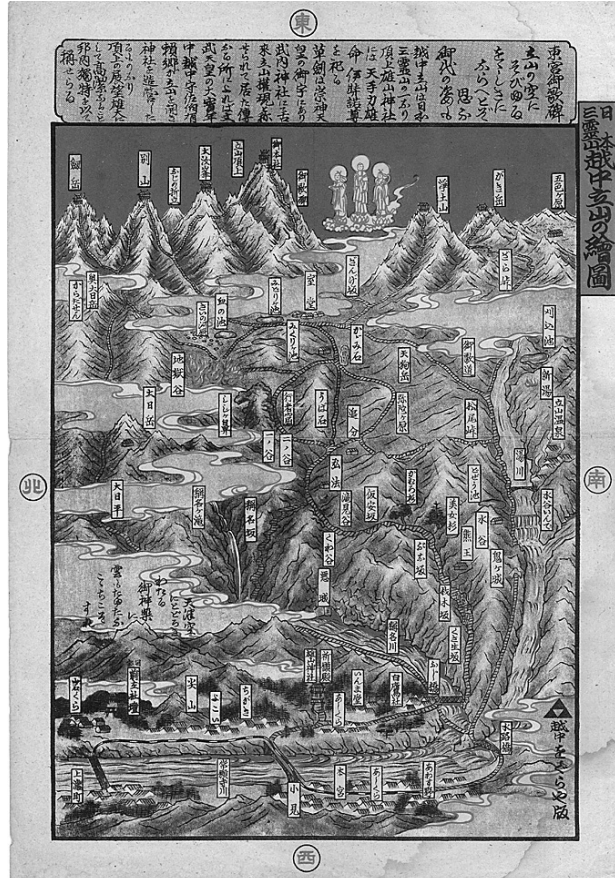
#### 【注】

- 1 富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録『富士山の絵札』（一九九六）。
- 2 岩科小一郎編「富士山の絵札」（『あしなな』一五六号、一九七七）。
- 3 西川順土編『安久美神戸神明社と司家』（司忠、一九八一）、鳥羽重宏「天照大神の像容の変遷について」（『皇學館大学神道研究紀要』十三号、一九九七）。
- 4 伊藤堅吉『富士山御師』（図譜出版、一九六八）、竹谷鞆負『富士山の祭神論』（岩田書院、二〇〇六）。
- 5 近藤喜博「はっけしんたう 伯家神道」（神道要語集（三）『國學院大學日本文化研究所紀要』五号所収、一九五九）。



## 7. 越中立山の絵図

石版彩色 三三・八×二六・八 cm  
明治時代初期



「日本三霊山 越中立山の絵図」

越中をぐらや版

東宮御歌碑

立山の空にそびゆるを、しきにならへとぞ思ふ御代の姿も

越中立山は、日本三霊山の一なり。頂上雄山神社には天手力雄命、伊弉諾尊を祀る。草剣は崇神天皇の御宇にあり。式内神社にて古来立山権現と称せられて居た伝なる所によれば、文武天皇の大宝年中、越中守佐伯有頼郷が立山を開き、神社を造営したるものなり。頂上の展望雄大にして高潔なること、邦内独特を以て称せらる。天津空にとどろきわたる御神樂に雲もたゆたふこゝちこそすれ

立山は、多くの人々の信仰を集めた山岳信仰の霊地であった。古くは平安時代の『本朝法華験記』や『今昔物語集』に立山の地獄の様子が記されており、〈この世〉ならざる〈異界〉である地獄の山としてその存在が知られていた。江戸時代には、立山の衆徒達が全国各地をまわって布教活動をかかに行ったことから、多くの人が修行の一環としての禪定登山に訪れ、現地で大変な賑わいをみせた。この布教活動では、衆徒達による廻壇配札活動、立山曼荼羅を用いた絵解きなどによって立山の霊験が語られ、立山への信仰が広がる契機となった。また、立山は女人禁制をとっていたが、多くの女性の信仰を集めた場所でもあった。これは、地獄とされる山中に「血の池」と呼ばれる池があり、血盆経信仰と結びつけた布教がさかに行われたこと、麓の芦峯寺で女性の参加が可能な布橋灌頂会という仏教儀礼が行われたことなどの理由によるものである。特に布橋灌頂会に関しては、江戸時代の後期に盛大な法会が行われた記録が残っている。布橋灌頂会の存在は衆徒の絵解きでも語られ、加賀藩領内外から多くの参加者が訪れたという。

その立山には、芦峯寺と岩峯寺という二カ所の宗教村落がある。両者の位置関係は、芦峯寺の方がより山側にあり、岩峯寺の方が現在の市街地に近い。それぞれに雄山神社祈願殿と雄山神社前立社壇を擁している。この両者は、加賀藩の宗教統制上の理由から別々に布教活動を行っていた。ゆえに、摺られたお札や縁起などには、両者の独自の特徴が表れている。例えば江戸時代中期以降に、布教活動の一環として絵解きで使用された立山曼荼羅には、両者の違いが色濃く現れている。立山曼荼羅とは、立山信仰の宗教空間が大画面に表された掛け幅式の絵図のことである。芦峯寺の影響が強いとされる立山曼荼羅には、禪定登山案内のための要地に加えて、開山縁起の内容や地獄での責め苦、浄土の様子、布橋灌頂会など芦峯寺独自の祭礼が、多くの登場人物を伴って詳細に描かれている。対して岩峯寺の影響が強いとされる立山曼荼羅は、もう少し簡素な印象を受けるもので

ある。画面には禪定登山案内のための宗教上の要地が記されるが、全体的には山の絵地図のような構図を持ち、同じ画面中に「立山縁起」の内容を文章で配したのもみられる。

この「越中立山の絵図」に注目すると、立山山中の信仰上の要地が一つ一つ名前を挙げて記されるところから、岩峯寺系の立山曼荼羅と似た登山案内図に近い描写がみられる。ただ、このような登山案内図風の絵図は、「山絵図<sup>2</sup>」と呼ばれて刷り物としても頒布されていた。これは、江戸時代から昭和初期まで立山の衆徒が布教先の人々を立山登山に誘うため、または立山を訪れた参詣者や登山者に対し、土産用として使用されたものである。絵図は芦峯寺・岩峯寺の両方で制作されており、版元は「越中をぐらや」となっているものの、ここで示した「越中立山の絵図」がどちらの影響下に置かれ、どのような過程を経て制作されたのかは即断できない。しかし、この刷り物には立山という霊地全体の宗教世界があらわされているということが言えるだろう。

図中に記される地名は、現在で言うところの観光スポットである。ここには、禪定登山をする者の案内としての意味も持ちながら、開山縁起や現地に伝わる伝説、地獄や浄土に関する地名や建造物など、立山信仰に関わる名所が実際の地図のように見やすく示されているのである。例えば、信仰のための登山のスタート地点には、霊峰立山への入り口である「石くら」や「あしくら」が記される。女性の立ち入りは芦峯寺までしか許されておらず、これより先は山、つまり山中他界の思想が示す〈異界〉であり、地獄や浄土のある〈死の世界〉であった。禪定登山をする人々は、岩峯寺や芦峯寺の宿坊で世話を受け、山を目指した。川を越えてしばらく山を登ると見えてくる「美女杉」や「かむろ杉」また「うば石」には、女人禁制の山である立山に無理矢理女性が登ってしまったことから、杉や石に変えられてしまったという伝説が残っている。地獄の様子はどうかだろうか。「地獄谷」「血の池」「さいの河原」などがそれである。立山の地には、有毒な

硫黄の臭気の立ち込める谷や火山活動によってできた不思議な光景が広がっていた。さらに「浄土山」からの阿弥陀三尊の来迎の様子から、浄土の光景を示す描写もみられる。阿弥陀如来は、立山の開山者である慈興上人（佐伯有頼）「立山縁起」のなかにも登場する。立山の開山者である慈興上人（佐伯有頼）が、鷹を追って山に入ると熊に襲われて矢を射るが、実はその熊は阿弥陀如来の化身であったというものである。

このように、絵図には雄山頂上の「御本社」の威光によって照らし出される、地獄や浄土を含めた〈あの世〉や立山の霊地全体が描かれている。言いかえると、この絵図には立山信仰の宗教世界が展開されているのである。図中に立山信仰の宗教世界が広がっているという点では立山曼荼羅も同様の意義を持つが、絵図は各自が自由に自分自身の手で広げられる大きさであり、いつでも立山の世界を堪能することができた。ゆえに、このような絵図には、修行の一環としての登山による巡礼の擬似体験や再現のような意味が付加されたということが言えよう。現世を離れて〈異界〉とされた山に入って戻ってくることは、擬似的な死と生まれ変わりの体験として、山岳信仰における修行の基本とされていた。それが、自分自身の手の中にいつでも好きな時に広げられるような絵図にまとめられることによつて、まだ登山をしていない者にとっては擬似的な体験となり、登山をした者にとっては追体験の道具となったであろう。〈死の世界〉を擁する立山の霊験に触れて、現世をより良く生きるための利益や付加価値が付与されていることが、この絵図の存在から感じられるのである。（前田智子）

#### 【参考文献】

福江充『立山信仰と立山曼荼羅―芦峯寺衆徒の勸進活動―』（岩田書院、一九九八年）、『綜覧立山曼荼羅』（富山県「立山博物館」、二〇一一年）。

#### 【注】

1 天保十三年（一八四二）「諸堂勤方等年中行事外数件」（『越中立山古記録』第四卷、立山開発鉄道株式会社、一九九二年）

2 研究史上の用語は「木版立山登山案内図」として分類されている。



## 8. 於竹大日昇天御影

木版墨摺（近代摺） 八九・一×三四・七cm



生まれながらにして私欲のない人がいます。つねに心を清らかにたもち、無償の愛で世の人々の救済に尽くす、慈愛と清貧の心をもった人がいます。それが江戸時代に生きた「お竹」という日本人女性で、彼女は大日如来の化身として崇敬されました。彼女をめぐる伝承はさまざまに改変を加えられ、多種多様の「お竹大日如来譚」が語り継がれました。

江戸大伝馬町の豪富の家に仕える竹女が大日如来の化身であったという、お竹大日如来譚の、もっとも最初の出版物は、元文五年（一七四〇）庚申四月仏生日の刊記をもつ、出羽国羽黒山麓黄金堂の於竹大日如来別当であった玄良坊仲真が撰述した『於竹大日如来略縁起』なのだろうと思います。袋綴装仮綴のわずか五丁の略縁起で、装丁と同様に物語もごく素朴なものです。その物語は、およそ一〇〇年後に製作された羽黒山荒澤寺正善院に伝蔵される三巻の『於竹大日縁起絵巻』はじめ、錦絵や諸書に記された「お竹伝承」の源泉でした。黄金堂に安置されるお竹大日如来像は元文五年にはじめて出開帳されたと伝えられています。その場所は不明ですが、『於竹大日如来略縁起』はその出開帳のために玄良坊仲真が撰述したものと考えて大過なからうと思います。

『於竹大日如来略縁起』は、竹女が大日如来の化身であるという物語の発端を、「ここに我が黄金堂に安置したてまつる於竹大日如来の来由を尋

ね奉るに、往年元和・寛永のころほひ、武蔵国比企郡に戒行堅固なる聖ありけり。正身の太日如来を拜せむことを深く願ひ、千里の行程をも遠しとせず、我が御山に歩を運ぶこと年久しくなりにけり。一とせ例の如く登山して、自坊に暫く止宿の折りがら、夜中に誰ともなくて告げたまはく、『汝、わが尊容を拜せんと思はば、江戸に行きて佐久間某が召つかひ竹女といふ者を拜すべし』となり。この瑞夢、既に三度に及びければ、行者は感涙肝に銘じて、宿坊なりける我が先人玄良坊宣安にしかじかと談話れば、玄良坊も霊夢を感じて、うち連れだちて大江戸に登りぬ。佐久間某は大伝馬町に住して名高き豪家なるままに、尋ね行きてあるじに語るに、是より先に主人夫婦も夢想の告を蒙れることありて、『問ひも来る』と待ちたりければ、互いに奇異なる仏勅をよるこび、その夜密かに竹女が部屋を窺がひ、兩人に拜まするに、不思議なるかな、平常よりも殊に端正美麗に見えて、その全身より光明を放ち、一室のうち赫奕たり。行者は、『このたび望みたりぬ』と、あまたたび礼拝稽首して、宣安と俱に終夜誦経し、翌ればあるじに暇を告げて、『両僧たがひに名残をしげに、泣々本国へ帰り行きぬ』と語り始め、行者と宣安が帰った後、『竹女は次の日より一間のみ籠りをりて、昼夜称名を唱へて、四五日ばかりはさてありけるが、寛永十五年（一六三八）三月二十一日の暁、俄かに紫雲たなびき、室内に異香薫じて、大往生を遂げをはりぬ』と竹女の終焉を記し、『そもそも此の竹女といへるは、常に仏名を称して慈悲の心深く、かかる豪富の家に仕へて、いささか不足なき身にはあれども、かりそめにも五穀を捨てず、我が食を減じて乞食・牛馬に施し、厨の水盤の水落しには布の袋を絞り置き、洗ひ流す雑菜といへども、すべていたづらにせざりけるとぞ』と竹女の清貧と慈悲行を紹介し、佐久間夫婦が現当二世の報謝のために竹女と等身の如来尊像を彫刻し、黄金堂に安置したのだと結んでいます。

この『於竹大日如来略縁起』が源泉となって、種々のお竹大日如来譚が生み出されました。「お竹は出羽国の湯殿山麓で浪人徳右衛門と於幾の子

として生まれ、十一歳の春に母が亡くなると、徳右衛門は竹を連れて、亡妻の後生を願うために西国巡礼の旅に出た。二人して江戸に戻り、お竹は病気がちな父を抱え、大伝馬町の豪商佐久間勘解由家に奉公した、「武蔵国比企郡の戒行堅固なる聖は乗蓮という羽黒山行者である」、「お竹が大日如来の化身であるとわかると、噂は江戸市中に広がり、たくさんの人がお竹を拝むために訪れた」、「お竹が大日如来のごとく昇天したとき、江戸中の人びとは深い悲しみに包まれ、お竹の臨終には乞食・犬・猫・鶏までもが集い、嘆き悲んだ」等々さまざまに語られました。正善院蔵『於竹大日如来縁起絵巻』には、お竹の臨終場面に乞食・犬・猫・鶏が描かれていて、物語の発信源を推量できそうです。

羽黒修験の山伏は、寺堂の維持管理や運営のための浄財を募るために、浅草寺・本所の回向院・木更津の選擇寺などでたびたび出開帳を催しました。お竹大日如来像はじめ、お竹が流しに結びつけて飯粒や野菜の屑を集めたという麻袋や、お竹が着用したという前垂れなどが展示され、『於竹大日如来縁起』の絵解きがあり、略縁起や祈禱札、また御影ふだが頒布されました。

お竹大日如来の人氣はすさまじく、「知らぬがほとけ 竹々ときき使ひ」と川柳に詠まれ、小林一茶も「雀子や お竹如来の流し元」の句を残していますし、徳川五代將軍綱吉の母・桂昌院（一六二七〜一七〇五）は、お竹の使った「流し板」を佐久間家から譲り受け、日夜祈りを捧げたといえます。桂昌院は「ありがたや 光とともに行く末は 花のうてなに お竹大日」と詠ってお竹大日への信仰心を表出し、のちに徳川家の菩提寺である増上寺の末寺・心光院に供養堂を寄進しました。「流し板」は供養堂に祀られる可憐なお竹像の足もとに今も置かれています。

純真な信仰心と清貧な生活、そして慈善・慈悲の精神をもったお竹は女性の手本でした。大日如来の化身という不思議な物語が出開帳によって喧伝されると、奉公人の鑑として、また生き仏として江戸市民の心を魅了し

ました。お竹の生きざまは人々の心を打ち、長く多くの人々の心に感動を与えました。お竹大日如来への信仰は、本来およそ現世利益とは無縁のものでした。

右の『於竹大日昇天御影』は、羽黒山修験本宗の本山、羽黒山荒澤寺正善院の島津慈道御住職が、「これは講中用、これは信者用」と説明しながら摺って下さったものです。「市内の禅源寺にもお竹は祀られていますね」というと、「あれはね、出開帳に失敗して、金がないから物を置いてきたんだ」というお返事でした。曹洞宗平田山禅源寺は本堂内の一角に「おたけ堂」を造り、独自に御影ふだや錦絵、絵解き用の『於竹大日如来行跡絵』を製作しています。

まことに妖艶な『於竹大日昇天御影』は、一勇齋国芳の『於竹大日昇天図』を忠実に版に起したものです。国芳が杉板に描いた『昇天図』は額装されて黄金堂境内のお竹大日堂の正面扉の上に飾られています。その縦一六三枚、横九〇枚もある大きな額縁の四隅には「奉献」「東都書肆大伝馬町丁目丁子屋平兵衛、同職人中」「細工人、碁盤師補田房吉」「嘉永二年四月吉日」と記されていて、嘉永二年（一八四九）のころにもお竹大日如来を信奉する講中がしっかり存続していたことを伝えています。

日本橋本町の小津産業本社敷地の一角に、「於竹大日如来井戸跡碑」が建っています。佐久間家の断絶後、信仰は親戚の馬込家に引き継がれ、その土地は小津商店の所有になりましたが、今も庶民信仰の記憶を伝えています。



お竹の墓は北区赤羽の獅子吼山善徳寺にあり、墓石に延宝八年（一六八〇）五月十九日と刻まれた命日には「お竹供養」が行われ、小さな可愛い御影ふだが印施されています。

「追記」帰途は車中泊になった雪の羽黒山調査にご同行下さった山本博也・関口静雄両先生に心からの謝意を表します。

（宮島 鏡、補関口）

9. 光明真言功德曼茶羅

木版墨摺 五〇・一×二七・一 cm  
江戸時代後期

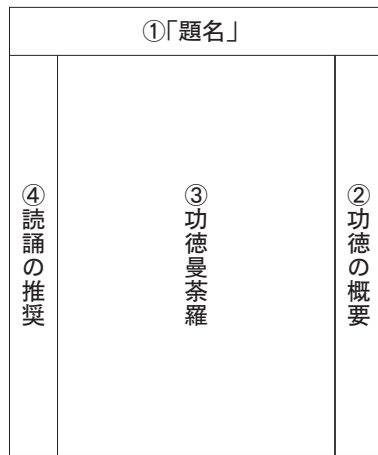


光明真言功德曼茶羅と題された、ちょっと変わった摺り物です。漢字仮名まじりの文体で書かれ、梵字には右に発音が付されており、その対象が仏教初心の民庶であったと考えられます。左枠外に「天保六乙未年十月吉日 奥州会津 沙門無言蔵 印施」とあります。製作者は江戸末期に京都六角堂能満院に住持し、凶像の収集と尊像の制作及び施印に尽力した大願憲海という仏画僧です。

光明真言は大日如来が五智の功德を二十三字の梵文にこめたもので、「不空羅索神変真言経」「不空羅索毘盧遮那仏大灌頂光明真言」などを根本經典としています。「オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン」と一心にお唱えすれば、発せられた光によりすべての罪障は消え去り、地獄・餓鬼・畜生・修羅に

生まれ変わった死者も極楽浄土に往き、また病氣などを取り除くなどの有り難い功德があります。

大願は、そのままでは難しい真言の世界を分かりやすく説くために、画面を四つに分割して曼茶羅仕立てにして一枚の画面に収めました。



まず、①には大きく「光明真言

功德曼茶羅」と冠しています。「功德」というなんとも魅力的な言葉を入れて、画面上部に大きく配置することで、人々の興味を引きつけます。次に②の柱には、先の根本經典を精査してまとめた光明真言の功德の概要を記すことで、いよいよ本題の曼茶羅部分への期待感を高めていきます。

③では胎蔵界・金剛界の大日如来の梵字を上段に配して、そのもとで光明真言二十三字の一つ一つの発音、意味、功德を曼茶羅に見立てて、分かりやすく図解しています。④では、光明真言の靈驗譚は泰音撰『光明真言照闇鈔纂靈記』（宝永七年〈一七二〇〉刊）や音如編『光明真言照闇鈔纂靈記拾遺』（正徳五年〈一七一五〉刊）などにも採録されていて、その利益を受けるために日々読誦に励みなさいと結んでいます。

まるで起承転結のような四分割の構成にしたのは、大願がこの「光明真言功德曼茶羅」を絵解きの場の教材として、また台本とすることを念頭に作成したからだと考えられます。難しい経軌をいかに解くか、その苦心の結果がこの構図であり、人々は徐々に興味を惹きつけられ、最後にはふかい密教の世界を知り得るのです。余白を惜しむかのように敷き詰められた文字からは、悉曇や密教へのふかい見識が伝わってきます。大願は悉曇の大家である慈雲の系譜を引く学僧であり、著作に『梵学宗要章』（嘉永六



年（一八五三）刊）などがあります。すべての翻刻はまた別の機会をいた  
 だくとして、今回は③の真言曼荼羅部分の一部を再現します。理解を容易  
 にしたく、改行しました。

— 弥勒菩薩—金剛薩埵—日天子—乃至諸仏菩薩—通種字ナリ

— 大日如来—定光仏—灯明仏—無辺光佛—宝幢如来—多宝如来—善名称吉祥  
 如来—

— 〇中央本地大日如来、三世常住法界体性智、光明也一切諸仏、光明此、句、中、  
 筆也

— 始メノ阿字ハ胎藏、本不生、理体也

— 日曜星—火曜星—龍猛菩薩—宮毘羅大将

— 婁宿—柳宿—房宿—箕宿—牛宿

— 両部不二、内証—不空縹索觀世音種子

— 金剛界ノ大日—退蔵ノ大日—一切衆生ノ体  
 三身万徳ノ如来ノ心中ノ密言ナリ

— 不空ノ義亦ハ無間無断ノ義也 — 内ニハ自証ノ大衆ニ住シ外ニハ化  
 他ノ悲門ニ至リ間断ナキ理リ也

大願は寛政十年（一七九八）会津安積郡赤津に生まれ、大和長谷寺にて  
 事相・教相の修業を積み、河内長栄寺の黙住信止から灌頂を受けました。  
 修学の間には諸山名利を巡遊して、有名な經典や仏画の書写集成に取り組  
 み、近世戒律復興を心ざした慈雲飲光の正法律を護持しました。「光明真  
 言功德曼荼羅」が印施された天保六年（一八三五）前後の大願は、在山二  
 十二年の長谷寺を下りて、故郷の会津の総鎮守八角宮社喜福精舎にあり、  
 ここで開版したものと考えられます。ここでも、大願は近隣の寺院を訪ね  
 ては図像の模写をしていましたが、それだけではなく、善本を求めては儀  
 軌や聖教の書写を精力的に行い、陀羅尼の開版などを行っています。今日評

される大願の画僧としての浄業は、こうした律僧としての行業が根本にあ  
 ったことと知れます。

大願は嘉永四年（一八五二）ころ再び上洛して六角堂頂法寺能満院に移  
 り、図像の収集と尊像の制作及び施印に尽力しました。大願が弟子たちと  
 整備した能満院の工房は、仏画作成を通しての戒律復興の道場となりまし  
 た。が、残念ながら元治元年（一八六四）の蛤御門の変にて焼失しました。  
 大願はその年に避難した蓮光寺に眠りました。左は安住義彦師『六角堂能  
 満院「大願」』（二〇〇六年、自在院刊）に載る「大願六十七歳像」（京都市立  
 芸術大学芸術資料館所蔵）です。



会津若松にある大願ゆかりの自在院には、大願が製作に関わったと考え  
 られる版木が多く伝えられています。その多くは護符や祈禱札、御影、和  
 讃など、民庶にひろく施されただろうと推察でき、さらにはこうした印施活  
 動が大願の寺院経営を支えるものであったと考えられます。また、宮島コレ  
 クション蔵の『弘法大師和讃文』の奥書には、「西国三十三所第十八番靈  
 場／京都紫雲山六角堂頂法寺中／能満院無言敬書／嘉永五年壬子正月初六  
 日／印施発願主／京智嶺会津沙門／麟浄寛順識」とあり、能満院にあった  
 大願が会津との交流を継続していたことを物語っています。（寺津麻理絵）

（参考） 阿住義彦師『自在院年譜版本・文書所蔵目録』（二〇一二年、自在院）

## 10. 大龍山正泉寺地藏菩薩御影

木版墨摺 五〇・一×二七・一 cm  
江戸時代後期



千葉県我孫子市湖北台の曹洞宗大龍山正泉寺は、弘長三年（一二六三）、鎌倉幕府第五代執権最明寺入道北条時頼の息女尼御寮法性の開基した法性寺がはじまりと伝え、江戸時代の中ごろから「女人成仏血盆経出現第一道場」を名乗って血盆経信仰の唱導活動を盛んに繰り広げた血盆経信仰の一大拠点だった。かつては宗門を挙げて血盆経信仰を鼓吹し、女性信者に血盆経を授与することに熱心だったが、しかし太平洋戦争後は、血盆経信仰は女性を蔑視するものだとして血盆経を授与することもいつしか行われなくなつた。正泉寺のしずかな境内には血盆経信仰の隆盛を伝える数々の石仏や銅造物が、今はその記念碑として佇んでいるだけである。

安政四年（一八五七）、尾州公の大奥から祈禱を依頼された正泉寺がその記念に版行した『女人成仏血盆経縁起』に、「諸々の女人、月水の汚穢、そのうえ子を産むとき不浄の血流れて、地神・山神・水神および惣べて一切の仏神を汚すが故に、命終の後、この地獄に墮ち、苦を受くること無量なり」とあるように、かつてわが国では出産や月経の赤い血は穢れとされ、そのため女性は成仏できず、血の池地獄に墮ちて無量の苦患を受けると考

えられていた。

しかし、釈迦はそんな教えを説いたことはない。いくつかの原始経典は、女性の修行者は不浄・性悪・淫乱の三悪を備えているから男性僧と伍すことはできないし、阿羅漢・転輪聖王・帝釈天・魔王・梵天の五地位に就くことも道理がなく、あつてはならないことだと差別を容認している。これが女人五障説のもととなり、加えて身分・地位の意を表わす原語スターナを、漢訳が「障」としたことが女性の月経を連想し、それを血の汚れ、悪露・穢血と解釈し、女性は月経があるためブツダになれない、成仏できないという思想が定着してしまつたのだ。すると女性が成仏するには男性に変身すれば可能になるという変成男子・転女成男説が生まれることになる。たしかに原始経典には古代インドの厳しい階級制を反映して、階級・人種・貴賤・貧富・老若・男女を差別した表現も存する。しかし、それは釈迦入滅後に加えられたものであつて、釈迦の説法を編纂した最も古い文献である『ダンマパダ（法句経）』や『スッタニパータ』には、人々を差別した教えは見当たらない。ブツダになるのに一切の差別はなく、無条件でだれでもがブツダになれるのだと釈迦は説いているのである。

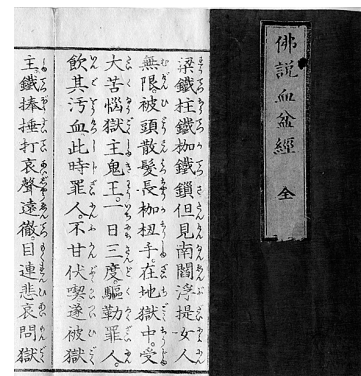
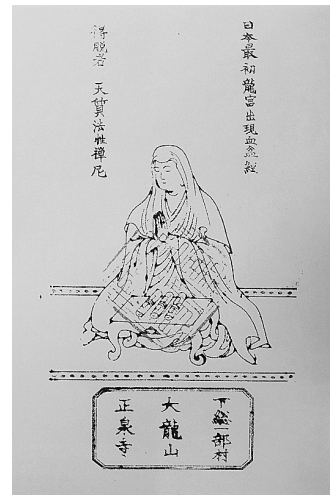
しかし、血盆経信仰の布教者は巧妙だ。およそこの世に女身と生まれれば、貴賤上下の隔てなく、月に七日、年に八十四日間、女人は赤い血を流す。その血は地神・山神・水神、一切すべての仏神を汚すゆえ、死ねば女人は血の池地獄に墮するので。縦横八万由旬の血の池地獄は恐ろしく、そこで女人は無限の苦を受ける。『血盆地獄絵図』を示されて、明日は我が身と思ひ悩み沈む女人たちに、血の池地獄に墮して無量の苦患を受けながら、血盆経の靈驗利益に縋って救われ成仏した法性尼の生涯を、僧は『尼御寮法性尼生滅之図』を指さしながら絵解きする。否応なく逃れ難い墮地獄の運命を忌避する法が伝授されたのだ。僧の説法は止まらず、次いではその有難い血盆経出現の顛末が、『女人成仏血盆経出現図』を指して絵解かれる。



時は応永二十四年（二四二七）四月二十八日、法性尼は自身の没後一五〇余年も経ったその日、十三歳の村娘に憑依して、娘の口走りを利して法性寺住職と応答する。

「われは最明寺北条時頼の娘尼御寮法性という。父時頼がわがために建立した法性寺の住持である。身は比丘尼でありながら、榮華に誇って三業を慎まず、持戒修善を怠っていた。七旬の光陰を送って命終した。生前の悪業ゆえ血盆地獄に墮ち、女身の宿因によって手賀沼の水底で頭に十六本の角を生やした蛇身となり、今も昼夜六度の苦を受けている。和尚よ、釈迦が一代に説かれた五千余巻の経文の中に血盆経がある。この経を七日間、毎日千巻読誦し書写すれば血盆地獄を脱するのみならず、末世の女人は血盆地獄を逃れることができる。女人は経を肌守りに掛け、死したる女人にはその墓に納め、月に二度は血盆勝会を営まれよ。わが父最明寺殿が安置した本尊地藏菩薩の霊告を得て、一刻も早く血盆経を手に入れられよ」という。これに応じて夜もすがら祈る和尚の夢に老翁に化身した地藏菩薩が現われて、「和尚よ、竜宮界に納める血盆経を汝に与ふべし。来日早朝急ぎ手賀浦に行きてみるべし」と告げられた。翌朝、住職が衆僧とともに手賀浦へ行けば、湖面はにわかには動揺し、一茎の白蓮華が池上に湧き出し、花中には一巻の血盆経がある。和尚はこれを持ち帰り、七日のあいだ毎日一千巻読誦し書写して法性尼の墓所に納めると、虚空に花降り音楽が聞こえ、香色の衣を着した女人が蓮華坐に坐して、「和尚よ、血盆経読誦し書写した功德によって、われ血盆地獄を通れ、蛇身を脱し、弥陀の浄土に往生するを得た」と告げたのだ。經典一部が湧出したことからこの地を一部と呼び、池水が龍のごとく吹き上がったことから法性寺を大龍山正泉寺と改めた。まことにこの正泉寺は、「日本最初女人成仏血盆経出現道場」であって、今も境内のここかしこに奇瑞の旧跡が歴然と存しているのである。

正泉寺には刷物の版木が数多く伝えられている。「正泉寺縁起」や「血



盆経縁起」も時に応じて改変が加えられている。法性尼は「執権北条時頼公と讃岐局を両親として寛元四年（一二四六）に生まれた」、幼名は「桐姫」、村娘の名は「法性寺檀家孫右衛門の娘おとり」、法性寺は「亡娘の供養のために時頼が建立した」などさまざまである。いずれも曹洞宗の碩学が関与したものと推量されるが、正泉寺が越中立山と並んで、なかく血盆経信仰の一大拠点になりえたのには、参詣の女人に授与される、たとえば冒頭に掲げた秘仏の本尊延命地藏尊の御影や、肌の守りの血盆経、また法性尼の御影、略縁起など一枚摺があずかって力を発揮したものとと思われる。秘仏本尊延命地藏尊は、時頼の兜の前立だったので、時頼が桐姫に持仏として授けたものと伝えられ、像高わずか二・五寸のものであるが、法性尼のことばとして、「ことさら靈感あらたかにまします」尊像だと安政四年版『女人成仏血盆経縁起』が伝えている。（関口静雄）

- （あべ みか 歴史文化学科）
- （まえだ ともこ 名古屋大学大学院博士前期課程修了）
- （みやじま かがみ 元本学オープンカレッジ講師）
- （てらつ まりえ 生活機構研究科生活文化史研究専攻修了生）
- （せきぐち しずお 歴史文化学科）